

して持っているのである。この科学への批判は、当然、EMに対する批判的言説にもあてはまる。例えば「MOA」はEMを批判する。それは安易な資財の利用を戒めたより先鋭化させた自然農法を強調するからである。これらEMにまつわる言説の科学に対しての姿勢は極めて両義的であるだろう。つまり、それらは科学的に語られてもいるが、しかしそこには現行の科学に対する批判がともなっているからでもある。このようなことは、<世界救世教>やEMに限定されることではない。例えば、宗教の局面全体において言えることであるかもしれない。宗教には、「ニューサイエンス」であるとか、最新の科学的知見などを組み込みながら、自らを正当化して、「科学的様式化」している部分はある。だが、そこには科学に対する微妙な位置が見え隠れしている。上述したように、「宗教ブーム」や「宗教回帰」といったことには、科学の発展した今日においてなぜそのような現象が生じているのかという含意がある。科学そのものが様々な問題を引起し、その万能観にかけりが見え始めたことも関わりがあるだろう。しかしながら、そうした現象には宗教が科学を補完するものとして位置づけられていることも、含意としてある。このことは宗教の局面の「科学的様式化」が単なるそれではないということを示している。ここには、簡単に「科学的様式」と呼ぶには適さない様式がともなっているように思える。当該様式は、「科学的様式」のサブタイプでもありうるし、あるいはまったく別の様式であるのかもしれない。すなわち、当該様式はどのような様式—「科学的様式」のサブタイプであるのか、それとも別の様式であるのかという問題を提起できるだろう。当該様式が科学的様式のサブタイプであるならば、サブタイプをいかなる様式であると表記すればよいのか、また、サブタイプはいくつあり、サブタイプ間の関係や「科学的様式」ないし他の様式との関係はいかなるものであるのか、という問題を提起する。当該様式が別の様式である場合も、同様の問題を出すことができる。そうした様式としてどのようなものがあるのか、それらの様式の「科学的様式」との関係やそうした様式間関係はいかなるものであるのか、という問題である。これらの問題は知識様式がいかなる

構造なのかということの視点化であり、捉えていかななくてはならない課題である。そして、そうした知識様式と科学との関係から、科学の制度化に対する視座を与えることができると思われる。

#### 資料

##### ○教団関係

- 『アメリカを救う』 一九五三年
- 『御神書(宗教篇)』 一九五四年
- 『信仰雑話』 一九四九年
- 『神示の健康』 一九八二年
- 『世界救世教奇蹟集』 一九五三年
- 『天国の礎 改訂版新版』 一九七八年
- 『天国の礎—社会・救世自然農法—』 一九九三年
- 『天国の福音』 一九四七年
- 『東方之光』 一九八一年
- 『病貧争絶無の世界を造る観音運動とは何か』 一九三五年

##### ○教団改革運動関係

- 『改革を選択した世界救世教』 丸山実 21世紀書院 一九八六年
- 『これが真の世界救世教だ』 小野田修二 日新報道 一九九二年
- 『世界救世教 新生への方向を探る』 世界救世教新生教団事務局編 南斗書房 一九八七年
- 『世界救世教 第二の創業に向けて』 世界救世教新生教団事務局編 南斗書房 一九八六年
- 『何をしている世界救世教』 松本明重 恒友出版 一九八七年

##### ○EMもしくは自然農法関係

- 『EMが人類を救う』『エヴァ 五月号』サンマーク出版 一九九七年
- 『エコ・ピュア』(財)自然農法国際研究開発センター 一九九二年
- 『MOA 自然農法ガイドライン』全国MOA自然農法産地支部連合会 一九九四年
- 『MOA 自然農法の哲学と実践』MOAインターナショナル 一九九五年
- 『世界救世教にアプローチ! 北朝鮮が始めた最後の神だのみ』『サピオ 2/26』小学館 一九九七年
- 『地球を救う大変革』比嘉昭夫 サンマーク出版 一九九三年
- 『地球を救う大変革 2』比嘉昭夫 サンマーク出版 一九九四年
- 『農業が活きる・工業が変わる・環境が蘇る EM環境革命』比嘉昭夫総監修 総合ユニコム 一九九五年
- 『微生物の農業利用と環境保全』比嘉昭夫 農文協 一九九一年
- 『人・くらし・生命が変わる EM環境革命』比嘉昭夫